第八不動地への転入に関する一考察

林　賢　司

十地の行道は「第八不動地」への転入を境として大きく二分されている。これは『十地経』自身が二世界の喩、梵天の世界に生まるるの喩、夢寤の喩（gñid kyis log pa las sad paḥi dpe）等によって明らかに語るところである。

初歓喜地より第七遠行地までの諸菩薩地は、発心発願して願を成就すべく不住道を行ずるに世間に染汚されることはない。しかしその行は世間道や二乗地、仏菩提に対峙して克服せんとする有功用行である。よって前七地は対立の境界、有限にして染浄なる世界である。そして初地から第七地までの進展には、観仏や過二乗地や具足菩提分法等において菩薩の得智自覚の程度に差異はあっても、内面的必然性があり、ある意味では初地の菩薩の自覚の希求が第七地にて一応満足したといえるのである。

第八不動地以後は無功用の行が自然に満足する菩薩地であり、不退にして自在なる世界である。自在行には命自在等の十自在とこの自在をもたらす器世間・衆生世間・智正覚に関する三種の自在行がある。この三自在行中、衆生世間に関する自在行とは一切衆生の機根に応じて自身を示現する調伏自在の行である。智正覚に関する自在行とは、一切の身相分別を遠離して身の平等より自身他身を分別しない第一義の智と衆生身等染分浄分を分別する世俗の智との二智によって、国土身乃至虚空身の十身、如来身乃至法身の十身を知り自身と作すのである。第八地以後は自在行の境界であるだけに、自覚すべき対象の仏身が覚他の行として無限に修する主体としての仏身に転ずるわけであり、世間道二乗地に対しては対立せず承認し救済する慈愛の境界となり、十大願が正しく成就し、仏国土を浄むる純浄の世界となる。無作自然自在なる大道に入った菩薩にとって菩薩道はそのまま仏行であるといっても何等支障はない。

この第八不動地への転入は功用を離れて無功用へ、対立の境界から慈愛の境界へ、有限の世界から無限の仏界へ転換することであり、前七地の進展とは異なった新たな躍進を意味するようである。

次にこの転入の菩薩道における意義を連続的要素と非連続的要素の二面性から考察することにしよう。

連続的要素とは前七地から連続している菩薩所行の力のことであって、不動地の初めに「已に修習された地を集めること（yoṅs su sbyaṅ ba byas paḥi sa bsdus ba）」の段で示される前七地の善根功徳の力と「全く清浄な忍を獲得すること（rnam par dag paḥi bzod pa thob pa）」の段で示される無生法忍の力である。無生法忍を得るのは一切法本来無生に入ることであって、この忍は人法二無我の証得を究竟せる忍である。すなわち初地には無分別智を直観してより第七地までの障の対治と得智という進展の中で、第六地で無分別智に通達して順忍を得、第七地で方便智に通達し、仏智に対する菩薩の自覚体験の進展として無生法忍に至るのである。得無生法忍は同時に有作有功用行を転じて無作無功用行に入ることであり、出世間心と世間心との二心の差別現行の離滅を意味している。

この力に依る転入は夢からの覚醒の如き大転換である。

菩薩はこのような連続的要素にて大転換を成就し、不動地に住するにもかかわらず、ここで重大な危機に直面せざるを得ない。その危機というのは菩薩が涅槃に入って衆生を利益することを棄捨するということである。この危機に堕するはこれまでの行はつまるところ「一身によって成就するというあり方で（eka-kāyâbhinirhāratā-yā）」行を成じたからではなかろうか。前七地の菩薩は不住道行を修するにあるけれどもその菩薩自身の功徳力だけでは転入を真に達成することはできず、無生法忍の力といえども菩薩一身の自覚せる智力であって、この忍力だけでは転入の要素として十全であるとはいえないのである。

この一身の起行による矛盾撞着の難関を打破するもの、真に無作自然無功用ならしむるものが非連続的な転入要素であって、それがすなわち諸仏世尊が親しくその身を現して法門の流れの中において「如来の智慧を与え給ふ」ことである。これは諸仏七勧の段としてよく知られている。この七勧の内容を要約すると、第一点としては菩薩の得た無生法忍を一法明としてこの一忍門を捨てることなく、またそれに対して楽足の心を起こさないで、未得の十力四無畏十八不共法の仏法を成就すべく勤求精進することを勧めている。第二点は仏法が成就している無量の仏界を観察し、仏法が成就する対象としての十方の無量の国土と衆生と法差別を観ずることを勧めている。第三点は寂滅解脱を得た菩薩に対して自分だけの解脱に満足せずに煩悩集の中にあって心寂静にあらざる凡夫衆生を悲愍することを勧めている。この諸仏の勧導には、個の解脱に止まらざる自覚の喚起と、菩薩が置かれている現実の場の自覚の喚起との二側面が見出されるようである。しかもこの非続連的な要素としての諸仏の勧発によってこそ、無生法忍の連続性が連続性としての威力を発揮することになるのである。

この諸仏からの大悲心の働きかけという宗教的体験を経なければ無生法忍を成就した菩薩といえども個の解脱にとどまり、菩薩の所願からみれば、菩薩自身が自覚して得た転入の力は全く無力に帰してしまうのである。

そこで大悲心を勧発するに「本の所願を念じて」ということが注意される。即ち歓喜地の十大願を思念することを勧めるのである。つまり原初的相に帰ることが要請されるわけである。そもそも諸仏が「起智門（sarva-jñajñānâbhinirhāra-mukha）」を与え給ふのも、「本願の力を保つことに住する」からである。いうまでもなく菩薩は仏に親近し帰依して発心発願したのであって、仏に対する信なくして発心も発願もありえないのである。しかもその願は菩薩の大悲心の証しであり、同時に仏の慈悲の顕れでもある。したがって諸仏の大悲心の勧発は仏の本願力の働きでもある。

以上第八不動地への転入に際し、連続的要素として菩薩の無生法忍の力、非連続的要素として如来の大悲大願力が考えられた。無限の仏界に転入するという飛躍的な転回が第八不動地への転入である。この転入は菩薩自身が自覚して得た忍行の力がなければ成し遂げられないのであるが、この転入が真に成就するためには仏が仏として菩薩の前に現れ大悲の勧めをなすという覚醒を通らなければならないということである。この宗教的覚醒は菩薩の中から自発的に生ずるものでなく、仏の本願力に呼応して生ずることを顕す。（註略）

（龍谷大学大学院）